

「葦」第 48 号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院

看護部長 高橋 美雪

—今や「当たり前」が当たり前ではない—機会あるごとに細井理事長・学長が述べられています。社会情勢が急速に変化していく中で、医療を取り巻く環境も急速に変わりつつあり、私たちがその変化に対応していくには今までと同じではならないと受け止めています。

特に目を見張るほど変化しているのが情報です。日々、際限なくありとあらゆる情報が私たちを取り囲み、その取捨選択に難渋します。その情報が正しいか否か、必要かどうかなど、その情報の更なる情報と整理が必要になります。研究の過程においても情報は欠かせず、その取り扱いには十分に配慮しなければなりません。そして、一つ一つの情報がとても貴重だということを忘れてはなりません。研究者の知識不足や自己満足でなく、文献検討が十分にされていて看護実践に意味ある事実や知見があるかということが吟味されなければなりません。

調査研究の中には多くの人達の協力を必要とするものがあります。平成 29 年度の院内看護研究でも看護師の意識調査や実態調査に関する研究が多くあります。調査で得られる一つ一つの回答や意見が「当たり前」に得られるものではなく、その一つ一つの情報が以後の研究結果や実践に大きく影響するのですから、その量と質には慎重にならなければなりません。調査の信頼性を最大限保証するための努力が必要でしょう。また、倫理的配慮をしているとしながらも現在のような情報社会の中で情報管理や守秘義務の徹底など研究者の資質も問われていることを覚悟しなければなりません。

実態調査では所属に留まらず、看護部または病院全体の課題と思われるものも少なくありません。実態は現実ですから、真摯に受け止めて改善に繋げなければなりません。看護実践の検証では、必ずしもマニュアルや手順が日々の看護ケアに活用されていないことは研究者だけでなく看護部管理者としても危惧するところです。マニュアルや手順があれば実施できる・していると「当たり前」に考えてはならないという現実を突き付けられたようでした。教育・指導に問題があるのか、マニュアルそのものに不備があるのかなど、それらを検討する委員会や関連部門に繋げることが重要です。特に患者のケアについては安全性が担保されなければなりません。医療者側の一方的な都合や利便性だけでなく、医療の安全と患者の傾向を踏まえた上で検討されなければならないと思います。

また、治療の選択や入院から退院における意思決定支援、家族支援なども情報が大きく関わり、活用する方法も様々です。スマートフォンが「当たり前」の時代にあって録音や撮影といった情報媒体を駆使して患者・家族の情報を共有するのは大変便利に思えますが、ルールとマナーを守って看護実践に繋げてほしいと思います。

「当たり前」が当たり前ではない—こうした認識を常に持って物事を探求すべきであると日々、自らにも言い聞かせています。